

# 長岡宮大極殿院回廊北西隅の調査

所 在 京都府向日市鶏冠井町大極殿 55-2 ほか 調査期間 2015（平成 27）年 8 月 10 日～10 月 31 日（予定）  
調査所管 向日市教育委員会 調査機関 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター（担当 梅本康広・中島信親）

## 1 はじめに

調査地は、長岡京の名前の由来となった、南北に長い岡（向日丘陵）の先端近くに位置します。現地表面の標高は 30.5～32.0m です。長岡宮の官衙復原では大極殿院回廊の北西部にあたり、また古墳時代中～後期の山畑古墳群および奈良時代の官衙跡である乙訓郡衙跡の遺跡範囲に含まれます。当センターでは、遺跡範囲確認調査として大極殿院回廊北西部の位置および構造を明らかにすることを目的に調査を行ってきました。

調査地は、故小林清先生の旧宅跡にあたります。小林先生は、中山修一先生らとともに長岡京研究の黎明期を支えた在野の研究者で、主に長岡宮から出土する軒瓦のついでの研究を行われました。とくに重圏文軒瓦の分布から後期難波宮大極殿・朝堂院の長岡宮移設を最初となえられました。その研究成果は著書『長岡京の新研究』にまとめられています。今回の調査では、長岡宮発掘初期に関する遺物も出土しています。

## 2 大極殿院回廊

大極殿院回廊とは、宮の中核施設である大極殿および大極殿後殿（小安殿）から成る大極殿院を囲う、廊下状の遮蔽施設（回廊）です（第 3 図）。古代の宮殿や寺院を囲う遮蔽施設には、柵、板塀、築地（土をつき固めた土塀）、回廊、築地回廊などがありますが、回廊は、内裏のみに用いられる築地回廊に次ぐ、格の高い遮蔽施設です。今回の回廊は 3 本の柱で屋根を支える構造の複廊とよばれるもので、中央の柱の間に塀を設けその両側（内外）に廊下状の施設を設けていました。

長岡宮の大極殿院回廊はこれまで北面回廊で 4 回（宮第 3・158・165・265 次調査）、東面回廊で 1 回（宮第 9 次調査）、南面回廊で 1 回（宮第 88 次調査）、西面回廊で 2 回（宮第 255・387 次調査）、あわせて 8 回の調査が行われており、外側柱間で東西 355 尺（105.2m）、南北 411 尺（121.66m）の規模で復原されています（第 2 図 c）。

古代宮都の大極殿院をみると長岡宮と平安宮の間で大きく構造が変更されていることがわかります（第 2 図）。藤原宮・平城宮・後期難波宮・長岡宮では四面すべてを囲い、南面中央に門（閤門）が配置される独立した空間をなしますが、平安宮では南面が壇（龍尾壇）になり南側の朝堂院と一体の空間となります。

大極殿院回廊の機能については古い文献にほとんど記載が無いため遮蔽施設として以外不明ですが、時代が下がり 12 世紀中頃の仁安元（1166）年および三（1168）年に行われた大嘗会に際して、内側の廊下を幕で仕切り、公卿および殿上人・受領から選ばれた五節の舞姫の、控えの間として使用されたことが記録されています（第 4 図）。

## 3 調査の成果

今回の調査では、回廊推定位置に 4 箇所（第 2・3・4・6 トレンチ）、大極殿院内に 1 箇所（第 5 トレンチ）、大極殿院外に 1 箇所（第 1 トレンチ）の計 6 箇所のトレンチを設定して調査を行いました。総面積は約 250 m<sup>2</sup>です（第 1 図）。

【第1トレンチ】 大極殿院北西隣接地の様子を確認するために設けました。残念ながら以前にあった建物の解体時に大きく攪乱されており顕著な遺構は確認できませんでした。しかし昭和四十七（1972）年に行われた宮第46次調査のトレンチの一部を検出しました。

【第2トレンチ】 回廊北西コーナー部を確認するために設けました。しかし段丘層（黄褐～黄白色粘質土）の直上まで近世～現代の遺物を含む包含層が堆積しており、遺構は近世以降に大きく削り取られたことを確認しました。

【第3トレンチ】 北面回廊を確認するために設けました。その結果、長岡京期整地層（赤褐色粘質土）の上面で、礎石据え付け穴8基と、その南北で溝状の凝灰岩抜き取り痕跡を検出しました。

礎石据え付け穴は、東西2間、南北2間分を確認しました。それぞれの間隔は、東西約3.6m（12尺）、南北約2.4m（8尺）で、既往の調査成果を追認しました。据え付け穴の規模は径1.2m、深さ0.1m、平面形は略円形で、埋土は多量の小礫を含む赤褐色粘質土です。

北凝灰岩抜き取り痕跡は、幅約0.8m、深さ約0.1mの規模で、埋土は黄褐色粘質土ブロックを多量に含む赤褐色粘質土、南凝灰岩抜き取り痕跡は、幅約1.0m、深さ約0.1mの規模で、埋土は暗赤褐色土で、基壇外装に用いられたと思われる凝灰岩の小片が含まれています。回廊基壇について、その外側に凝灰岩を用いた石組みの雨落ち溝が設置される例（後期難波宮大極殿院回廊）と設置されない例（長岡宮朝堂院南面回廊）が確認されています。今回の調査で確認した凝灰岩抜き取り痕跡は遺存状況が著しく悪いため、雨落ち溝が設置されたか否かは確認できませんでした。両溝の内側の距離は8.15m（約27.5尺）です。

また、断ち割りおよび攪乱の底部から溝状の痕跡を数箇所確認しました。長岡京期整地土の下層で、段丘層を切り込んでおり、埋土に古墳時代中期の埴輪を含むことから、埋没古墳の周濠を確認したと考えられます。位置および間隔から2基以上の古墳が存在した可能性が考えられます。なお、調査地の北で行われた宮第46次調査では、一辺17mに復原される山畑4号墳が確認されています。

【第4トレンチ】 西面回廊を確認するために設けました。第2トレンチと同じく回廊推定位置は近世以降に大きく削り取られていました。

【第5トレンチ】 大極殿院内部の様子を確認するために設けました。長岡京期整地層上面で院内に施された石敷を検出しました。整地層上面の標高は31.4mです。石敷は数cm程度の礫がやや密にひろがる様子を確認しました。

【第6トレンチ】 第2・4トレンチで西面回廊が確認できなかったため、調査地南側の地表面がやや高い地点で回廊が遺存していないかを確認するために設けました。しかし第2・4トレンチと同じく回廊推定位置は近世以降に大きく削り取られており、今回の調査地では西面回廊推定位置はほぼすべて攪乱されている可能性が高いことが判明しました。

出土遺物には、軒丸瓦2点（平城宮式重圈文、型式不明）、長岡京期の土器類、平・丸瓦の他、古墳時代の埴輪（蓋（きぬがさ）形・円筒）・須恵器があります。また側面に『長岡京第一回発掘記念』と手書きされた湯飲み茶碗が出土しています。

### 3 調査の意義

調査成果は、次の3点にまとめることができます。

- ① 大極殿北面回廊の礎石据え付け穴および南北の凝灰岩抜き取り痕跡を検出したこと
- ② 大極殿院内郭の石敷および長岡京期整地土を検出したこと
- ③ 回廊下層から埋没古墳を確認したこと

①では、大極殿院北面回廊の柱位置とその間隔や基壇の規模を確認しました。これまで狭小な面積での調査が多く、ごく初期の調査を除いて、確実な柱位置や基壇幅が特定できる成果を初めて得ることができました。具体的には、まず回廊の柱間の距離は、東西 3.6m (12 尺)、南北 2.4m (8 尺) と既往の調査成果を追認しました。また中央の柱筋と大極殿中軸との距離は 52.1m (約 176 尺) で、

$$12 \text{ 尺 (回廊桁行の柱間距離)} \times 14 \text{ 間} + 8 \text{ 尺 (回廊梁間の柱間距離)} = 176 \text{ 尺}$$

と一致することから、大極殿院回廊は大極殿中軸を基準に割り付けられて建造されたことがわかりました。また南北の凝灰岩抜き取り痕跡を確認したことにより回廊の基壇幅を推定することが可能になりました。凝灰岩抜き取り痕跡の間隔は、内々間で 8.15m (約 27.5 尺) なので、これまでの回廊基壇の復原値 28 尺 (8.29 m : 柱間 8 尺 + 柱から基壇端 6 尺の 2 倍) とほぼ同じであることが判明しました。

②では、大極殿院内に施された石敷を検出し、当時の地表面の高さ (標高 31.4m) を確認しました。また断ち割り調査等で確認した段丘層上面の標高は 30.9~31.1m であることも確認しました。その間に堆積する長岡京期整地土は、調査地のほぼ全域で確認しましたが、深さは厚さ 0.1m 前後が残るのみでしたが、本来は 0.3~0.5m 程度の厚さで造成されたことがわかりました。

③では、段丘層を切り込む溝状の痕跡以外に、長岡京期整地土や近世以降の攪乱などからも多量の埴輪が出土しており、調査地周辺には数基の古墳が存在したことは確実です。これらの古墳は周濠の埋土の上を長岡京期整地土が覆っていることから、長岡京造営時に破壊されたものと思われます。

## 参考引用文献

小林清『長岡京の新研究 全』比叡書房 1975 年

中尾芳治「後期難波宮大極殿院の規模と構造について」『難波宮址の研究』第十 財団法人大阪市文化財協会 1995 年

## 各都城の大極殿院回廊の比較 (単位:m (尺))

	全体の規模 (外側柱間)		基壇幅	柱間	
	東西	南北		桁行	梁間
後期難波宮	106.2 (359)	83.0 (280)	8.91 (30) [6.5+8.5+8.5+6.5]	3.71 (12.5)	2.52 (8.5)
平城宮 (第二次)	118.3 (400)	84.7 (287)	9.17 (31) [5.5+10+10+5.5]	3.8 (13)	3.0 (10)
長岡宮	105.2 (355)	121.7 (411)	8.29 (28) [6.0+8.0+8.0+6.0]	3.55 (12)	2.37 (8)

長岡宮跡第508次調査  
(7ANEDN-12地区)

 調査トレンチ

X=117.450

- 第1トレンチ 宮第46次調査トレンチを確認
- 第3トレンチ 北面回廊礎石控え付け穴8基を確認
- 第5トレンチ 大極殿院内側の石敷を確認
- 第2・4・6トレンチ 西面回廊は確認できず

Y=26.900

Y=26.875

Y=26.850

建物

1 Tr.

P46 7AN14D

「山畑4号墳」

向日市立会第88079次

P265 7AN14V

2 Tr.

3 Tr.

X=117.475

「北面回廊」

P72 7AN14 I

4 Tr.

6 Tr.

「西面回廊」

P290 7ANEDN-2

P490 7ANEDN-11

X=117.500

「大極殿後殿  
(小安殿)」

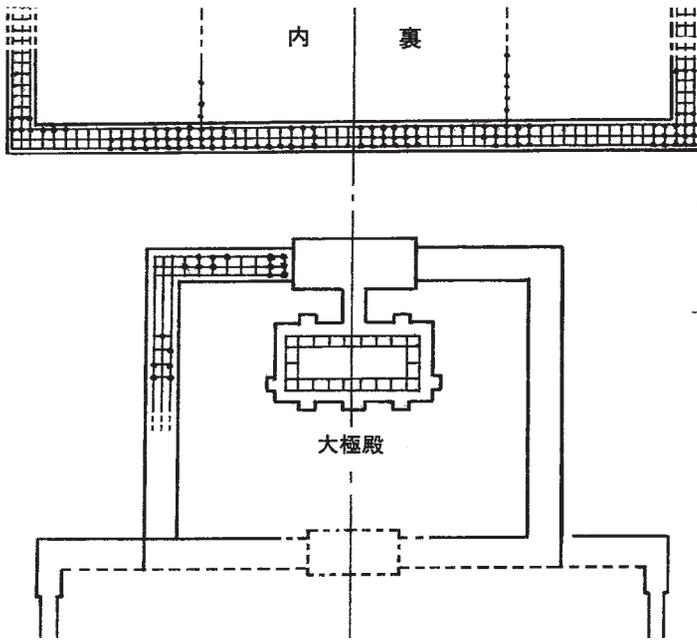
5 Tr.

「大極殿」

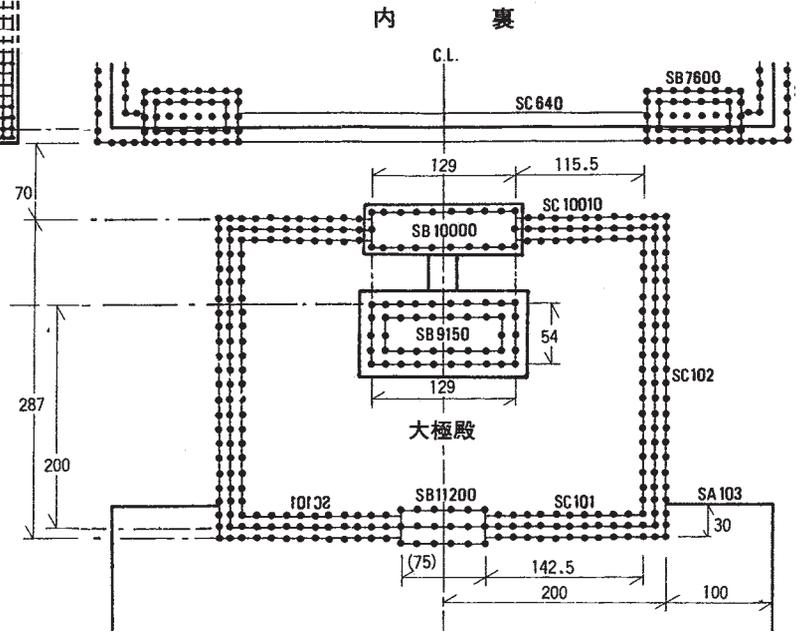
P345 7ANEDN-4

0 10 20 30 40m

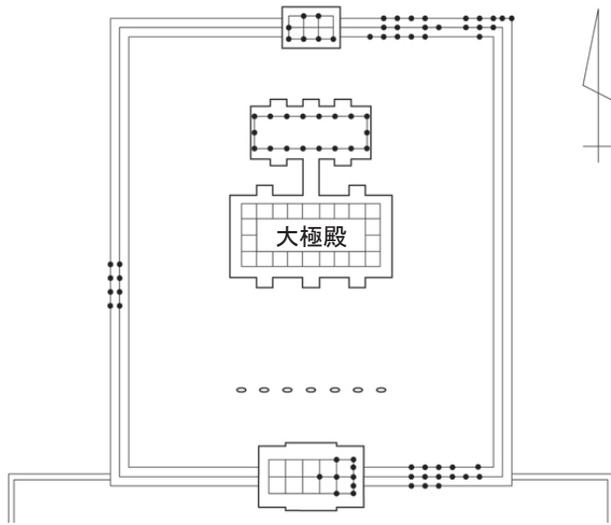
第1図 調査地平面図



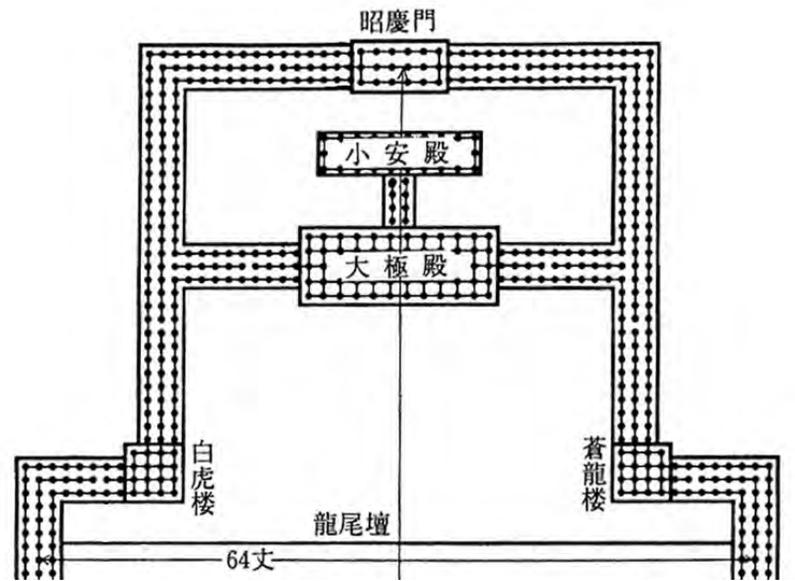
a) 後期難波宮



b) 平城宮（奈良時代後半）



c) 長岡宮

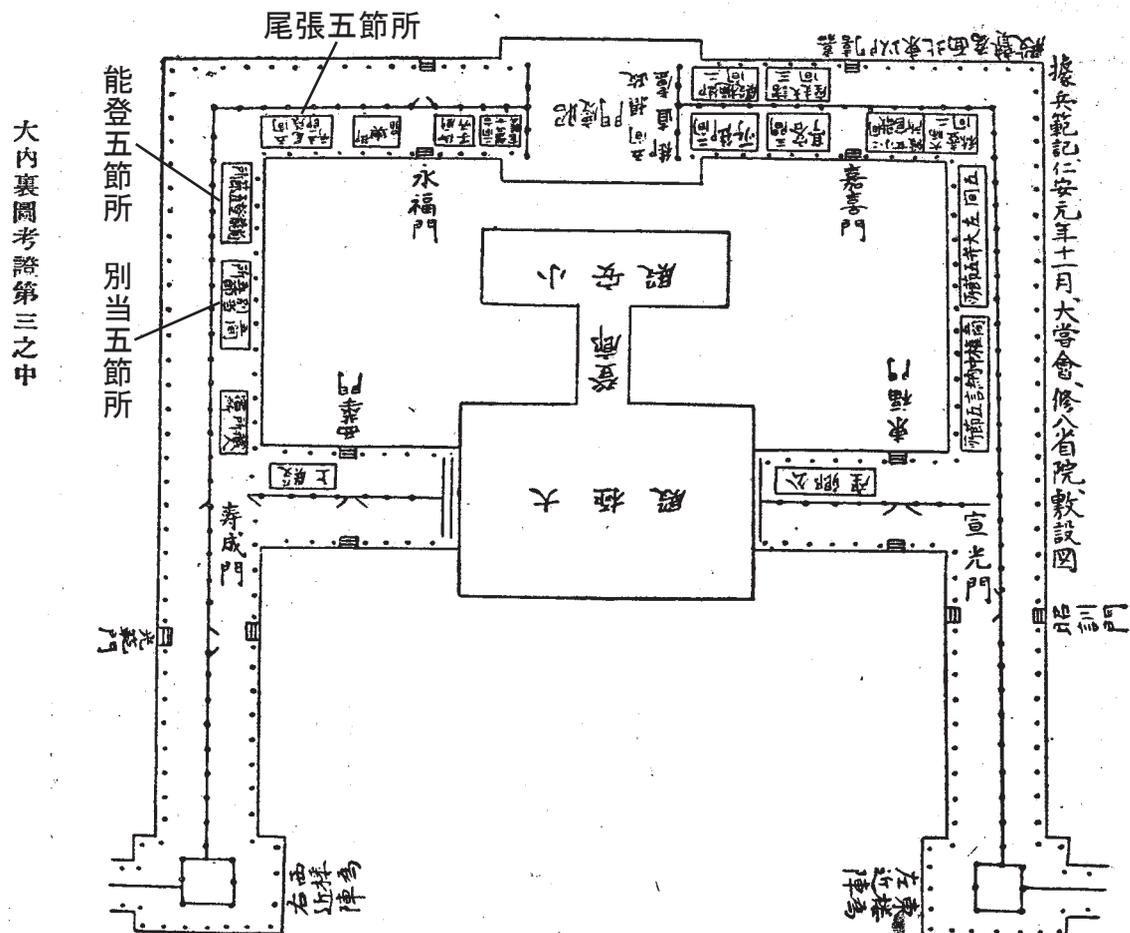


d) 平安宮

第2図 後期難波宮・平城宮・長岡宮・平安宮の大極殿院（中尾 1995 を一部改変）



第3図 大極殿院回廊復原CG (AR長岡宮)



第4図 平安宮の大極殿院回廊 (裏松固禪『大内裏図考証』)